



# ミンガラバード こんにちは

認定 NPO法人  
日本・ミャンマー  
医療人育成支援協会  
〒700-0815  
岡山市北区野田屋町2-4-18  
TEL: 086-224-0102  
FAX: 086-221-2554  
URL: <http://www.mjcp.or.jp>



## 5年間に100人育成

**補助助産師を農村へ**  
西山理事 奨学制度創設

今年の「あかね基金」を受ける学生たち(帽子姿)。前は講師エーヤワディ管区

医療がほとんど行き渡らないミャンマーの農村で、母子保健看護の仕事をする補助助産師を育成しようと、協会理事の西山央子さんが奨学金制度「あかね基金」を設けた。5年間にわたり、毎年20人ずつ、計100人に支給する。

ヤンゴン西方のエーヤワディ管区といわれる地域。医師や助産師、看護師が1人もいない、いわば無医療の貧しい農村が多い。そこで優秀でも貧困のために就学をあきらめる若い女性た

なミャンマーの農村で、母子保健看護の仕事をする補助助産師を育成しようと、協会理事の西山央子さんが奨学金制度「あかね基金」を設けた。5年間にわたり、毎年20人ずつ、計100人に支給する。

ちに、奨学金制度によって勉強してもらい、助産師と同じ様な仕事をしてもらおうというのだ。

ミャンマーでは助産師の資格をとるには2年間、教育を受けなければならぬ。西山さんは3月にミャンマーに出かけ、現地で支援施設を訪問。今年の奨学生たちの勉強の様子を見てきた。西山さんは、「国民健康財團」の人たちと共に研修施設を訪問。今年の奨学生たちの勉強の様子を見てきた。「互いに顔の見える支援をと思い立ったのがこの奨学金制度です。これからも機会があれば訪れ、親交を深めたい」と話している。

2008年サイクロン被害で移住した人たちが多いヤンゴン北部の貧困地区。こここの僧院の付属施設として、1階は「八田特別クリニック」、2階は教育センターの建物を寄贈した。

僧院は、インドのデリー仏教大学で博士号を取った若い僧が運営。この地域では学校に行っていない子供が多く、そんな子100人に僧は学生ボランティアとともに、寺子屋形式で一般教育をし、英語も教えている。

クリニックでは、主に子ども老人の健康管理にあたる。月2回、ミャンマー医師会の医師たちが巡回して、検診、予防接種、健康講座を開いたりする。クリニックと勉強室には、東京の「地球元気塾」からの寄付で、新しい診察ベッド、薬品棚や勉強机、ロッカーなどが備えられた。

# 4年間に若手医師ら68人受け入れ

## ミャンマー医学教育強化プロジェクト



木股岡山大学教授に聞く  
――資金面はJICAのほぼ全面的大の木股敬裕教授(形成外科)協会理事、写真)に聞いた。

プロジェクト推進の中核を担う岡山大の木股敬裕教授(形成外科)協会理事、写真)に聞いた。

――資金面はJICAのほぼ全面的大の木股敬裕教授(形成外科)協会理事、写真)に聞いた。

それはミャンマーの医療、医学の底上げです。若手医師らは帰国後、それぞれの分野で活躍するでしょう。しかし、そことにとどまらず、次の世代を育ててほしい。そのことを私たちもきっちりフォローします

な協力ですね。

協会の岡田茂理事長をはじめ小出典男副理事長らがかつて岡山大教授時代にミャンマー医療支援を続けられたこと。それを引き継いだ協会の活動。これら

の実績が評価され、実現したのです。

――資金面はJICAのほぼ全面的大の木股敬裕教授(形成外科)協会理事、写真)に聞いた。

岡山大にはマンダレー医科大とヤンゴン医科大(II)から医師2人がやつめざす。岡山大にはマンダレー医科大とヤンゴン医科大(II)から医師2人がやつめざす。

すでに来日。2人ずつ各大学で4年間、基礎系の博士課程で学び、博士号の取得をめざす。岡山大にはマンダレー医科大とヤンゴン医科大(II)から医師2人がやつめざす。

事業費は約4億円。JICA(国際協力機構)がそのほとんどを負担する。

岡山大を中心とした6大学の「ミャンマー医学教育強化プロジェクト」が動き始めた。将来のミャンマーの医療を担う優れた人材を育てるのがねらい。今年度から4年間に若手医師や放射線技師ら68人を受け入れ、研究や研修をしてもらう。

## 岡山大など6大学

てきた。それぞれ松井秀樹教授(細胞生理学)と西堀正洋教授(薬理学)の研究室で指導を受けている。他の56人は2週間から3ヶ月、6大学の臨床系で画像診断技術を習得したり、救急・麻酔技術を学んだりする。大学側からもミャンマーへ出かけてセミナーを開催し、また医療現場などを視察する。

昨年12月急逝の八田武志さん。遺志はミャンマー貧困地区の医療に生かされる。

新しい「八田施療クリニック」には医師、看護師が常駐し、新たに産室も設けた。また、歯科医師が回ってきて治療にあたるようになった。

開所式には知事と市長が出席。地域の喜びの大きさがうかがわれた。

新規の呼びかけに応じた13・14か所目の寄付クリニックがヤンゴン郊外にでき、2月中旬、相次いで開所した。どちらも寄付したのは岡山市在住で、去年12月に90歳で急逝した会社会長、八田武志さん。遺志はミャンマー貧困地区の医療に生かされる。

## 寄付クリニック 2カ所完成



「八田特別クリニック」の開所式風船を飛ばして祝った=ヤンゴン郊外

昨年12月急逝の八田武志さんの遺志

## 2階は寺子屋

2008年サイクロン被

害で移住した人たちが多いヤンゴン北部の貧困地区。

こここの僧院の付属施設として、1階は「八田特別クリニック」、2階は教育センターの建物を寄贈した。

僧院は、インドのデリー仏教大学で博士号を取った若い僧が運営。この地域では

学校に行っていない子供が

多く、そんな子100人に僧は学生ボランティアとともに、寺子屋形式で一般教育をし、英語も教えている。

クリニックでは、主に子ども老人の健康管理にあたる。月2回、ミャンマー医師会の医師たちが巡回して、

検診、予防接種、健康講座を開いたりする。クリニックと

勉強室には、東京の「地球元気塾」からの寄付で、新しい診察ベッド、薬品棚や勉強机、ロッカーなどが備えられた。

## 歯科医も巡回

# 国際医療協力 結局は人と人



新ヤンゴン総合病院で教授から説明を聞く筆者(手前)

新年早々、ミャンマーでの1週間は、とても贅沢な時間でした。国際医療協力プログラムへの参加は何か経験がありますが、その時その時で見える世界が違いました。どの形であっても、海外で何かをはじめるにあつてこそだと実感しました。一緒にいたある先生が手術指導日前の準備の際に、おしゃつた言葉がとても印象的でした。「プロフェッショナル」という言葉が「人と人」の関係があつてこそだと実感しました。

岡山大医学部医学科5年 川尻 智香

新年早々、ミャンマーでの1週間は、とても贅沢な時間でした。国際医療協力プログラムへの参加は何か経験がありますが、その時その時で見える世界が違いました。どの形であっても、海外で何かをはじめるにあつてこそだと実感しました。一緒にいたある先生が手術指導日前の準備の際に、おしゃつた言葉がとても印象的でした。

## 訪問記

### ミャンマー

岡田茂先生に同行して2月に11日間、看護師の尾堂広如さん、歯科衛生士の志茂加代子さんと私の3名でミャンマーを訪問しました。旅を続けるにつれて、私たち日本人にミャンマーの人たちが大きな期待を抱いていることを実感し、途中からは、日本の看護大学を代表しているような感じに

新年早々、ミャンマーで時間が少しづつ広くなっていることを実感できました。短期間に人材育成、研究協力、無償医療支援、医療実践のための物資支援、クリニック寄贈など、様々な国際医療協力の在り方を学びました。どの形であっても、海外で何かをはじめようとする時にキーとなるのがカウンターパートであり、結局は「人と人」の関係があつてこそだと実感しました。

岡山大医学部医学科5年 川尻 智香

新年早々、ミャンマーでの1週間は、とても贅沢な時間でした。国際医療協力プログラムへの参加は何か経験がありますが、その時その時で見える世界が違いました。どの形であっても、海外で何かをはじめるにあつてこそだと実感しました。一緒にいたある先生が手術指導日前の準備の際に、おしゃつた言葉がとても印象的でした。

# 看護の心は共通です

なり、責任感で押しつぶされそうにもなりました。そんな中で思いを新たにしたことをつけます。

岡山大学病院  
看護教育・研究  
センター

**保科 英子**

WHO(世界保健機関)  
の2012年の統計による  
と、ミャンマーの新生児死  
亡率26人(出生1000人  
対)で41位、乳児死亡率41  
人(同)で50位、妊産婦死  
亡率1.333人(2010年、  
妊婦1000人対)でした。

日本の新生児死亡率が1人  
(出生1000人対)にも  
満たないことを考へると、  
まだ発展途上なのです。  
国民健康財團のタン・セイ  
ン氏も「病院での出産が増  
えれば、死率は低下する」  
と語っていました。都市部

では、年間に3,000人もお産がある病院もありますが、医師不足、助産師・看護師不足、さらにその教育が、医師不足、助産師・看護師も不足をしている状況です。それでも日本からの援助で、助産施設や設備が各地に設立されたり、学生の寮が新しく整備されたりしてきました。協会の支援で作られた助産施設で生後3日目の赤ちゃんを抱かせてもらいました。ミャンマーの

がありません。日本の50年くらい前の看護教育を思い出しました。まだ高知女子大、聖路加看護大しかなかつたころ、先輩たちの多くは欧米に留学し、現在の看護教育の礎を築いてくれました。ミャンマーがありませんでした。ミャンマーにはヤンゴンとマンダレーにしか看護大学がありません。日本の50年

明日を担うこの命の重みを忘れないで、多くの人々の力を合わせて支えていく必要があると思いました。

ミャンマーにはヤンゴンとマンダレーにしか看護大学はありませんが、予防医療やチーム医療の観点からも、志茂さんのような歯科衛生士が活躍する日が遠くないださったのです。ミャンマーから看護師を受け入れ、大学で修士・博士課程を修了しもらいました。ミャンマーでの看護大学を増やし看護教育のレベルアップを図り、看護師の質を上げていく。日本の看護教育と同じ道を歩んでいく支援を、私たちもしなければ痛切に思いました。

訪問したいくつかの病院の中で印象に残ったのが、マンダレーから北へ行ったところにある100床ほど

の地域の基幹病院です。広い土地を思う存分横に広げた病院で、とてもきれいに掃除され、整理整頓が行き渡っていました。私は「清潔なことは看護にとって大

事だ」と思いました。日本人の看護師が支援を、私たちが活躍する日が遠くないださったのです。ミャンマーで、いろんな人たちの思いが支援として受け継がれている状況を目撃することができました。日本は、本当に嬉しい限りでした。日本は、本当に嬉しい限りでした。

ミャンマーで、いろんな人たちの思いが支援として受け継がれている状況を見て、私も戻後苦しい思いをして、その苦しい時期を乗り越えてきた、今度はお返しをする番だという思いが受け継がれていく——。そんなことを実感した旅でした。

△

協会は3月、岡山大学との間で「相互協力に関する協定」を結んだ。

△

ミャンマーとの学術研究交流については、これまで両者は協力し合ってきた。これからは、交流実績を積極的に相互公開するよう努める。また、岡山大は講座や病院、研究センターなどでミャンマー医療人研修に協力する。

△

協会は3月、岡山大学との間で「相互協力に関する協定」を結んだ。

△

## 岡山大と協定 交流実績公開

### 編集後記

東京6大学があり、旧7帝大と呼ばれた大と呼ぶたのもする。しかし、その「6大学」は初耳でした。どことどこ…? おとしの秋、岡山を訪れたミャンマー保健相の歓迎会で、岡山大学首脳が6大学共同で人材育成にあたる構想を明かすのを聞いたときです▼疑問はすぐ解けました。千葉、新潟、金沢、岡山、長崎、熊本。いずれの医学部も歴史のある旧制医科大が前身です。国際医療活動をするのにふさわしい連携といえるでしょう▼プロジェクトは本格的に始動しました。協会の岡田理事長によると、やつてくる若い医師らの多くは将来、間違なくミャンマーの医学界のリーダーになる人たちだという。日本の6大学といえば、彼の国ではいざれ、岡山大などのグループを指すようになるかもしれません。少なくとも、医療関係者の間では。

(西崎)

△

△

△

△

△

△

△

△

# 協会だより

経営コンサルティング会社メディヴァ(東京)、それに経産省が協力した。

技術1人は今年初めに来日。

1ヵ月間 岡山大学病院、岡山県健康づくり財團病院、岡山大福クリニック、セントラルクリニック伊島(以

上倉敷市)、倉敷成人病セ

道路エリア・パートナーズ

俱楽部から協会への寄付1

00万円があてられた。

### 岡山大と協定 交流実績公開

#### 協定

#### △

#### △

#### △

#### △

#### △

#### △

#### △

#### △

#### △

#### △

#### △